No.54
2013. 3. 10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■市民力が問われる今 ……1
■ネパール調査報告 ……2～3
■from Laos ……4
■インドシナ半島勉強会に参加して ……4
■from Cambodia ……5
■クメールシルクのデポー販売 ……5
■今年も熱かった！よこはま国際フォーラム ……6
■「ブータンと日本」～本当の幸せって何だろう？～ ……6
■「あーすフェスタかながわ」孔さんに聞く ……7
■気仙沼だより その4 ……7
■活動日誌 ……7
■INFORMATION ……8

市民力が問われる今

副理事長　松本陽子

「この国はどこに向かうの？」

昨年12月の選挙で、政権が交代しました。町の人に新政権に望むことをインタビューすると、答えはすべて「景気をよくしてほしい」です。安倍首相はアベノミクスなる経済政策で、景気回復を最優先しています。景気をよくするには、公共事業の大盤振る舞いがあるでしょう。そして景気がよくなることがあれば、おそらく今夏の参院選でも自民党は過半数をとり、憲法9条「改正」まで行ってしまうのではないかと心配です。2013年度政府予算案は、防衛費が11年ぶりに増額になりました。竹島・尖閣諸島の諸問題もあります。将来子や孫に「なぜ戦争（憲法改正）を止められなかったのか？」と質問されたらなんと答えたらよいのでしょう。「まずは経済」というその中身が本当にこの国を良くするのか、この先どこに向かって行くのか、教育、憲法、原発は一体どうなるのか、これからがとても大事です。人任せでなく、私たち市民が力をつけて、さまざまな問題に立ち向かっていかなければなりません。

「頑張らなくちゃ、NPO」

先月、私たちが開催した「地球の木講座」（p6参照）には嬉しいことに多くの参加者がありました。GDP（国内総生産）の成長を追い続けてきた日本は、経済的には豊かになりましたが、生活の満足度や幸福度に結びついていません。

電車の中吊り広告

地球の木　検索

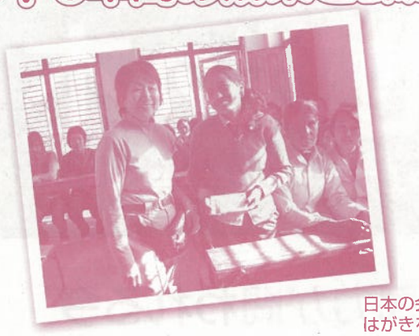
世界で最初にGDPからの脱却をうたったブータンのGNH(国民総幸福)の考え方やそれに沿った国づくりの話から、これからの日本が真に幸せな社会を築くためのたくさんの課題を受けとりました。経済も良くなることは必要ですが、それだけではない一人ひとりの幸せを、また自分たちの生き方をじっくりと考えてみなければならないと実感しました。地球の木が、社会を少しでも善くするための小さなきっかけを周りの人に与えることができるとしたら、活動を広く知ってもらい、一人でも多くの賛同者を得ることが大切と考えます。幸いなことに今、神奈川県が「NPO認知度向上キャンペーン」を進めており、県民にNPO活動に関心をもってもらい、活動への直接の参加や、寄付という形での参加を呼びかけています。そのキャンペーンのインターネットサイト「かなチャリ」の「かにゃお（ネコ）の世にゃ押し太鼓判プロジェクト」で紹介されている12団体の一つに地球の木も入っています。また、横浜そごうの正面入り口で行われたそのPRイベントにも参加し、フェイスブックやツイッターで様子を発信するということにもチャレンジしました。

「世にゃ押しプロジェクト」の一環で、2月には鉄道広告キャンペーンも行われ、県内を走る私鉄・JRの5つの路線で何本もの電車に全面広告が出され、地球の木もしっかりとアピールされました。いろいろな場所で、様々な方法で、地球の木を発信し、沢山の人に関心を持ってもらい、何かの方法で参加していただけることを願っています。

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

ネパール調査報告
幸せ分かち合いムーブメント5年間の成果と課題

ラジャバス地区は山の上



日本の会員からの
はがきを手渡す

2012年11月20日から12月4日まで、「幸せ分かち合いムーブメント」の評価のため、ネパールを訪れました。5日間村に滞在し、この5年間でプログラムに参加した人たちに会い、話を聞きました。奨学金を受けた学生の人数や図書室の書籍の数などの「量的」なデータは見えやすく、結果を見ていく材料となります。今回は特に見落としがちな「質的」な成果も見ることを頭に入れて調査に当たりました。同じものを違った視点から見ることで、全く違う絵が見えてくることがわかりました。

このような方法で調査しました

調査に当たったのは、外部評価員としてお願いしたアニタ・マナンダールさんと丸谷のふたりでした。村の人たちが本音を話せるよう、現地NGO・SAGUNの理事やスタッフは参加を控えました。アニタさんはフリーの開発アドバイザーで、森林や薬草についての知識が豊富な方です。北海道大学で博士号を取得され、日本語も堪能です。

調査では、キーパーソンからの聞き取りやグループとの話し合いをはじめ、豆を使ってプログラムの優先順位を考える「投票ランキング」や、木の絵を描いて枝の部分に成果を書き入れる「ツリーダイアグラム」などの参加型調査法、現地視察などを行いました。

調査後アニタさんと調査結果をまとめ、SAGUNの理事会メンバーに対し、報告会を行いました。この後、SAGUN、村の委員会（SMCC）、そして村人と結果を共有し、それぞれの段階で評価を行い、今後の計画に反映していきます。

調査でわかったこと

■教育分野

図書室：2006年に初めて高校を訪問した時は、小さな部屋に鍵のかかった書棚や机がほこりをかぶっていました。今は屋上に建設された明るい図書室に約6,000冊の図書が並び、隣には閲覧室があり、1日10～40人の生徒が本を借りるようになりました。学校側も図書カードを作り、返却遅延の罰金制度を設けるなど、管理体制も整ってきていました。生徒との話し合いでは、図書室にある小説や伝記などが人気でした。「シェイクスピアの作品が読みたい」という意見が出るほど、読書への関心が高まっていることがわかりました。

ラジャバスの図書室：山の上のラジャバス地区にも小学校の旧校舎に小さな図書室ができました。約300冊の本が並んでいます。図書委員会は父母と教師の5人。管理方法もまだわからない様子でしたが、何でも学びたいという意欲に満ちた委員さんたちでした。地域の青少年グループがお祭りで寄付を集め、本の一部に充てました。地域で支える小さな図書室。町まで遠いこの地域で子どもから大人までが楽しく利用できる場になることが期待されます。

奨学生：5年間でのべ74人の生徒が奨学金を受けて高校を終了しました。熱心で卒業認定試験に受かっている女子生徒がいるいっぽう、卒業試験に合格していないケースも多く見られました。SMCC会長の話では、成績トップの学生への奨学金制度は他にもあるが、貧しい家庭やマイノリティを条件にしているこの奨学金は評価に値するとのことでした。「SAGUNや地球の木の人たちに励まされて一生懸命勉強した」という奨学生の話から、これも私たちの重要な役割であると感じました。

ピンタリ地区で農民たちと集会を開く

豆を使ってプログラムの優先順位をつけるSMCCのメンバー

収入創出プログラム参加者から聞き取りをするアニタさん

新しくできたラジャバスの図書室で図書委員たち

奨学生から小学校教師に
なったジャナクマヤさん

収入創出プログラムに参加した農民たち（ラジャバス）

小学校教師サポート：奨学金を得て卒業した後、村の小学校の教師になった女性2名に会いました。正式な雇用ではなく、ボランティアに近い報酬しか得ていませんが、教師の経験を得ることができ、すぐに応用できる教授法を教師トレーニングで学び、とてもよい機会を与えられたということでした。奨学金・教師サポート・教師トレーニングがうまく結びついているよい例です。

子連れで教えているジャナクマヤさんからは、「勉強は途中でやめないで。チャンスが必ず来るのであきらめないで」と後輩へのメッセージがありました。

■生活改善

収入創出プログラム：経済的に困難な農家を対象に、子どもたちが学校に行けるよう収入を向上させることを目的に2008年度から始まりました。各地域ごとに10人程度の農家を選び、各家庭に1年～1年半の間に5,000ネパールルピー（約5,000円）の融資をし、農民は種や資材などの購入資金に充て、収入を増やします。

4年間で10グループ90人が融資を受けました。資金の返却もうまく行っています。現在200,000ネパールルピーが回転資金として各地域を巡っています。

地域によって地形や水の有無など状況は異なります。また新しいものに取り組んで失敗したり、業者の情報を元に始めるケースがありました。活動を開始する前にていねいなオリエンテーションなり、種や農薬の知識を知ることが必要です。今後は行政の農業指導員などの協力も得て適切な予備知識を参加者に持ってもらいたいと思います。

■ムーブメント推進

ロシ・ラハール：マンガルタール村とその周辺地域の人々の声を発信することを目的に発行されている季刊誌です。村の歴史、行われている活動、そして新しい視点について学ぶとともに、読書の習慣を根付かせ、記事を書くことへの関心も育っています。2011年度までに11号が500部ずつ発行され、周辺地域の学校にも配布されています。

SMCCの委員の優先順位は高くなかったものの、生徒たちからは大きな支持を得ています。自分たちが寄稿することができ、実際に参加できることも大きな魅力でしょう。作文トレーニングや作文コンテストにもつながり、教育分野にも成果を生んでいます。現在はSAGUNが入力や編集などの作業を行っていますが、今後は学校に移転させる方向へ向かうことがのぞまれます。

調査を終えて

・集まってくれた人々

私たちの調査に全部で200人近い人が集まってくれて意見をたくさん述べてくれました。人を集めるための人材が各地区にいることと、農作業や家事の合間に時間を割いて集まってくれる人がいたことは重要です。

・変化について

5年間の大きな変化としては、高校生・教師や収入創出農家の人たちが、それぞれ集まって話し合う場を持つことができたことです。これは数字だけではわからない部分でしょう。

・女性や若者の声を

新しく編成された村の委員会（SMCC）7人の中には女性がふたり含まれています。女性をメンバーに入れるだけでなく、意見を出せるような環境づくり、習慣づくりが今後重要で、地球の木も訪問時になんらかの貢献ができるとよいと思います。また、高校生たちの声が計画段階でなかなか取り上げられないことも課題です。若者の主体性を育てる工夫が必要です。

・より参加型の活動に

環境プログラムや収入創出プログラムもより参加型の取り組みをしていく必要があります。若い人も一緒に村を歩いて地図を描き、環境に関して、または収入創出に関して何ができるか自ら考える取り組みも今後行っていくとよいと思いました。　（ネパールチーム　丸谷士都子）

＊詳しくは、「ネパール評価報告書」をご覧ください。

from Laos

ラオス駐在中は、興味深い現地だよりをたくさん寄せて下さったＪＶＣの平野さん。昨年８年ぶりに帰国していろいろ感じることがあるようです。今回は、そんなところを書いていただきました。

ホームレス談義

バーシーの儀式での平野さん

印象的だったラオス人とのやり取りに、ホームレスについてのものがあります。日本は豊かだから貧しい人はいないだろう、というラオス人に対し、ホームレスの人々の存在を教えると、驚きとともに「ピノーンはどうしているんだ！？」。さて、「ピノーン」とは？政府？行政？NGO？答えは「親戚」です。これは答えに窮します。まあ、援助できないこともあるから、という曖昧な答えに今ひとつ納得できない顔をしつつ、「ではそのへんを耕すなり、森で食料を探せばよいではないか」。これもまた……農地法やら色々あるし、鍬一つで始めるラオスと違って農機具も高額だし、元会社員には体力も……私の説明にどこまで納得したかは分かりませんが、彼は「ふうん、そう考えるとラオスも悪くないな」と一言。

ラオスでは、都市部では核家族化も見られるものの、それでも親戚などを預かっているケースが見られます。別に非常事態とは限らず、「どっかで仕事が見つかるまではいるんじゃない？」といった風情で、農作業を手伝ったり。もともと10人で住んでいたりする家庭にとっては、11人になってもさして生活費も変わらず、衝撃を吸収してしまうわけです。ご近所や友人知人との助け合いも日常的に見られます。

久しぶりに日本で暮らすと

日本はどうかというと、非正規雇用の契約を失った人が、あっという間に路上生活になる、あるいは過酷な労働と核家族の家庭が全てという環境で、心身の健康を損ねる、といったケースを頻繁に耳にします。今私は、地域や人との結びつきを深めようとしています。地域のボランティアや釣りの会に顔を出し、友人たちと酒を酌み交わし、そして義理の両親との同居も検討しています。職場と家庭以外にも居場所を持ち、トータルで生活の質を向上させたいのです。

また、ラオスには親切な人が多いとも感じました。大家族的大らかさから来るのか、非常に人付き合いの垣根が低いのです。日本人も親切ですが、知らない人に気軽に声がかけられない。荷物を持ったお婆さんに手を貸そうと思いつつ、「持ちましょうか」の一言が出ない。ですから私は、人に関わろう、人に話しかけよう、と心がけています。久しぶりの電車通勤、満員電車の静寂が不気味です。足を踏んだら「すいません」と言うのは勿論、踏まれたほうも「アイテ」と言えばよい。あたかもそこに誰もいないかのように振舞うよりよほど人間的です。荷物にしても、「持ちましょうか」の一言だけでなく、「ちょっと持ってもらえません？」の一言が出る社会。ラオスにはそれがあり、そんな他者との関わり方は、私がラオスから受けた最も好ましい影響だと思っています。

（JVCラオス事業担当　平野将人）

インドシナ半島勉強会に参加して

地球の木ラオスチームでは、これまでJVCにお願いしたり「ラオス概説」をテキストに学習会をしたりしてきましたが、今年度はクメールシルクチームと共催で11月6日、JVC元ラオス担当の島村昌浩さんにインドシナ半島の歴史をお話していただきました。

ラオス人は、一歩引いて奥ゆかしく、ラオス人は、のんびり果報は寝て待てと、ラオス人は、ガツガツ働かない。働き者でどんな工夫もする日本人とは違うけど、日本人の中にもどこかあるような気がする、あってほしいようなDNA。そういう気質はどんな歴史から培われたのか、いや歴史を培ってきたのか、お忙しい島村さんに話していただいて、楽しい勉強会になりました。

学校で日本史と世界史を別々に勉強する私達には、想像できないほど文化も経済も複雑に入り組むインドシナ半島。10世紀そこに中国内陸から南下してきたラオス人は国を形成しないで、小さな都市のような形ではじまったようです。多くの民族が国、文化を築き、繁栄し、戦い、滅亡しという歴史が繰り返される中、ラオス人は争いを避け、人のいないところ、いないところへ行って、住み着いていったんだという話が胸に落ちました。

（ラオスチーム　久保田由紀子）

＊「水牛と牛の家畜銀行」は準備が始まっています。

from Cambodia

二つの出来ごと

イーメイがセンターをやめました

コンテストで賞をもらったイーメイ

2012年11月末、タケオの職業訓練センターを訪れました。訓練生の中にいつもの顔が見あたりません。2010年の初めにセンターへ来て、先生たちが「がんばっている」といつも話していたイーメイがいないのです。先生たちの話によると、イーメイのお父さんはアルコール依存症で、お母さんへの暴力が絶えず、厳しい状況の家庭だったようです。イーメイはいつも他の生徒たちが作る1.5倍のスカーフを織っています。がんばり屋かなと深く考えずにいましたが、彼女なりに必死に家族を支えようとしていたのでした。しかし、それだけではどうすることもできない状況になり、とうとう働きに行ってしまったのです。

タケオなどの農村地域では、少女たちは、重要な現金の稼ぎ手です。家が貧しく、学校を止めてプノンペンへ働きに行ったという話をセンターでもよく聞きます。高校を卒業するまでのわずか２～３年程度ですが、心身ともに成長が著しい年頃で、しっかりと学び、そして考える力を育てる大切な時期です。しかし、農村の貧困家庭では、そのわずかな期間が持ちこたえられず、「一番簡単な方法」ということで少女たちを働きに出すのです。

初めて会ったころからずっとイーメイは、おとなしく、決して前に出てこない子でした。初めの頃は、スカーフの縦糸の糸切れも多く、端の始末もガタガタで、「もっと丁寧に」と厳しく注意したこともあります。しかしその後、どんどん上手になり、去年のコンテストでは、独創的なデザインの作品を何枚も仕上げ、私たちを驚かせるほどになりました。そして少しずつですが笑顔を見せてくれるようになった矢先のことでした。イーメイが働きに行った工場が少しでも、よいところでありますように……

タイちゃんの結婚式

11月24日、いつも現地で案内・通訳をしてくれているカンボジアのチャンタイさんが7年越しの恋を実らせ結婚するというので、クメールシルクチームの3人が結婚式に出席しました。相手は日本人で、地球の木にタケオの職業訓練センターを紹介してくれたNGO「Love&Peace」（大学の教授・学生が中心となって活動している）の学生だったKくんです。プノンペンのスタメアンチャイにある「ゴミ山の子どもたちを海に連れて行く」というプログラムで、Kくんはその子どもたちの一人だったチャンタイさんにひとめぼれし、彼女に話をするために必死にカンボジア語を習得し、二人は付き合い始めました。その後は、チャンタイさんが日本語を学んで、お互いに7年間カンボジアと日本を行き来して、この日を迎えたのでした。カンボジアの結婚式は年々派手になってきていて、通常、二日間かけて、500人～多い人は1,000人、2,000人もの招待客が来るそうです。「質素に短くしました」というチャンタイさんの結婚式は1日だけでしたが、お色直しは午前、午後で計8回。200人以上のお客さんが招待されていました。いくつもの山を乗り越えてきたこの若い二人に幸多きことを祈っています。

（クメールシルクチーム　筒井由紀子）

クメールシルクのデポー販売

昨年10～12月にかけて、事務局のスタッフが横浜市内や近郊の生活クラブデポー、延べ８ヵ所に出向き、フェアトレードのクラフトの展示会販売を行いました。一人でも多くの人に手にとってクメールシルクの作品を見ていただきたい、それを織るカンボジアの少女たちの話を聞いていただきたいとの思いからでした。

「私、会員です」「会報いつも読んでますよ」と言う人に会うことができたり、前回のがとてもよかったからと二度目の購入をしてくれる人がいたりして、嬉しいことが多々ありました。ただ、「冷凍ケースのそばに立ち続けるのは、寒くてちょっときつかった」というスタッフの声に思わず「ご苦労さま」。丁寧なクラフトの説明、地球の木のこと、きっと多くの人に熱い思いは伝わったはずです。また、機会があったら皆さんの近くに出かけます。ぜひ声を掛けて下さい。

（会報作成チーム　沼田由美子）

今年も熱かった！よこはま国際フォーラム

２月の３連休の9日、10日、赤レンガ倉庫の向かい側にあるJICA横浜に653人の老若男女が集りました。横浜および周辺地域に拠点を置くNGO、NPO、学校、国際機関など約40団体による国際協力・国際交流・多文化共生に関する講座・ワークショップは、熱心な参加者で溢れていました。

地球の木は、今年2つの講座を担当しました。一つは「みんなの思いが力になる～僕たちの700日」。東日本大震災の被災地、気仙沼の若者たちを招いて、活動を発表する機会を設けました。地球の木が立ち上げをお手伝いしたNPO「Tree Seed」の小野寺大志さんとスタッフの吉田由香さんが、復興支援のあゆみ、NPO設立に至った経緯、設立後の活動状況、仮設住宅の人々の寄り場である「ポプラの木」の利用者さんたちの生の声などを丁寧に話して下さいました。

ネパールの村ってどうなっているの？

もう一つの講座は、「ネパール『幸せを分かち合う』村づくり～声なき人の声とは…」。ネパールの村のしくみを疑似体験してもらうワークショップです。このワークショップは、昨年9月の国連大学グローバルセミナー、1月の「JICA横浜開発教育指導者セミナー」に続き3回目です。参加者からは、「実際に村人の役になってみることで学びがあった」「参加型のワークショップで、参加者がぐいぐいと引き込まれていくのがわかった。短い時間でまとめていて、とてもよかった」「パワーポイントで説明されるよりも、ワークショップを使った方が理解しやすい」などの感想をいただきました。

「よこはま国際フォーラム」は、毎年2月の連休に開催されます。皆さまも来年はぜひ参加してみて下さい。

（会報作成チーム　乳井京子）

地球の木講座
「ブータンと日本」～本当の幸せって何だろう？～

今年度の「地球の木講座」がとりあげたのは、「幸せの国」として世界が注目する「ブータン」。ヒマラヤの麓にある九州ほどの小さな国だ。講師に関西から、長年ブータンの研究をしている草郷孝好氏を迎え、2月17日、開港記念会館の一室に60人余の人々が参集した。

幸せって何だろう、自分の場合

草郷さんはまず、参加者を小グループに分け質問を投げかけた。「これまでの人生で一番幸せだと感じたのはどんな時？」「人が幸せであるためには何が大切だと思いますか？」など。老若男女、たまたま隣り合った者同士がちょっと上気した面持ちでお互いの話を聞きあう様子は、会場をとても和やかなものにした。

国民の多くが“幸せ“と答える ブータンの国づくりとは

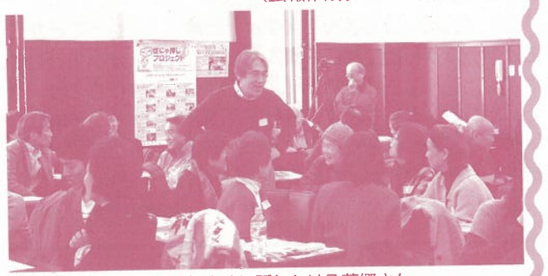
2008年に制定された憲法には、「政府の役割とは、一人ひとりの国民がGNH（国民総幸福）を追求できるように社会の諸条件の整備に努めることにある」と明記されている。具体的にどんなことをするのかというと、チベット仏教観を基盤に、たとえば ①収入格差や富の集中を避ける ②民族文化の保存 ③地域コミュニティの協働や拡大家族の尊重 ④森林は全土の6割を維持する、などだ。世界が一目おくブータンのGNHだが、課題もある。よい政治、住民自治を実現できるか。

また、会場からは「グローバル化で人や技術が流入し過ぎて体制が崩壊しないか？」という質問が出た。草郷さんはこう言う。「ブータンの人らしく、バランスを考えうまく対処するのではないか。二つの大国、中国とインドに囲まれながら、自分たちの国をしたたかに守っている。ブータン国民はかなり政治能力の高い人たちだと思います」

日本でもGNHを生かしていくことができるか

残念ながら時間不足で、あまりこの話は聞けなかったが、日本の地域レベルのチャレンジもいくつかあるという。東京の荒川区ではブータンのGNHを参考にGAHを提唱している。水俣市は20年以上かけて環境モデル都市として分断された地域の再生を果たした。

（会報作成チーム　斎藤和子）


皆に気さくに話しかける草郷さん

「あーすフェスタかながわ」孔さん（前企画委員長）に聞く

今年も5月11日、12日に本郷台あーすプラザにおいて、多文化共生のおまつり「あーすフェスタ」が開かれます。昨年、一昨年と二年にわたってフェスタの企画委員長を務められた孔 連順（コン リョンスン）さんにお話を伺いました。

“壁を作っているのは日本人だけではない”

孔さんは在日コリアンとして、日本で生まれ育ち、謂われなき差別を経験しながらも、日本人だけが壁を作っているのではなく、自分たちも作っているのではないかと考え、孤立するのではなく、地域の中に入り、誤解からくるあつれきを少しでも減らそうと積極的に活動しています。「あーすフェスタ」参加もそのひとつです。

“自分たちの存在をアピールする場として”

こういう趣旨のおまつりでは、日本に住みながら、なかなか自分たちの考えを外に発信する機会が無い外国籍の人に「企画委員長をしていただこう」ということがいつからか慣わしになってきました。「あーすフェスタ」の意義がそこにあります。この種の催しではとても珍しいことですが、企画段階から運営、開催に至るまでを50人ほどの委員たちが主になって7～8回集まり、県と協働作業で仕上げているのです。

“多様性はエネルギーに”

日本人も含めてバックグラウンドの異なる様々な国籍の委員たちが、それぞれの価値観で、考え方をぶつけ合い、納得するまで話し合いながら、結論を導き出す過程は、まさにフェスタのエネルギーになっているのです。毎年のように、一般募集による100人近いボランティアも参加して、翌年には自分たちがやってみたいと、次につながっているそうです。

“見て、食べて、買って、話して”

神奈川県には160を超える国と地域のおよそ17万人の外国籍の人たちが住んでいます。展示物を見て、おしゃべりしながら屋台の食べ物をつまんで、参加者や会場に来ている人たちとふれあうことができるのは、県民のメリットではないでしょうか。それが「外国籍の人たちと共に生きる」とはどういうことなのか考えることにつながるかもしれません。

（会報作成チーム　浜辺美英子）

気仙沼支援報告
気仙沼だより その4

五右衛門ヶ原では、現在気仙沼で一番多い300戸を超す仮設住宅が立ち並び600人以上の方が生活をしています。市内の外れにあるため、車が無い方や高齢者の方にとってはとても不便なところです。

トレーラーハウス1台を五えもんハウスとして、低価格で地元の新鮮な野菜と米、手作り弁当、お惣菜、また週1回、婦人服や雑貨などを販売しています。そしてハウスの一角を住民の方が集うコミュニティスペースとして、利用しています。

「スーパーが遠い為、買い物がすごく大変。五えもんハウスで、重い野菜も購入できるし部屋まで運んでくれるから、とっても助かってる」「仮設住宅の台所はとても狭く火事がこわいから、揚げ物も出来ないし、ちゃんとした料理が出来ない。お惣菜、お弁当を販売してくれるのはすごくうれしい」「ここで皆とおしゃべりができる時間がとても楽しい」といったうれしい声を頂いています。

震災から2年になりますが、普段笑顔でおしゃべりしている皆さんのほとんどが、将来の事に悩み、大切な家族を失った心の傷は深いままです。

「復興住宅は、全然先が見えない。説明会を聞きに行っても、アンケートばかりで話が進んでいかない。本当は、生まれ育った場所にまた家を建てたい」（中高年男性）

「子どもの事も考えると安全なところに土地を購入して家を建てたいが、学校の事もあるし、金銭面でも簡単にはいかない」（若い世代のご夫婦）

「今せっかく近所付き合いが上手くいっているのに、復興住宅が出来て、そこに移ったらまた付き合いを一から始めなくてはならないから不安だ」（独居高齢者の女性）

私たちは、話を聞く事しか出来ませんが、トレーラーハウスで楽しくお茶のみをして、少しでも気持ちが軽くなってくれたらと思っています。

（Tree Seed 五えもんハウス物販ブース担当　吉田由香）

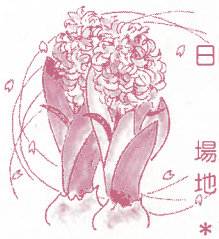
五右衛門ヶ原仮設住宅

活動日誌（12月～2013年2月抜粋）

12月1日	東戸塚デポー展示会
7~8日	日限山デポー展示会
10~11日	霧が丘デポー展示会
20日	第7回理事会
27日	カンボジア・タリーさん 事務所訪問
1月12日	JICA開発教育指導者セミナー ワークショップ「声なき人の声とは？」
24日	第8回理事会
25日	ボランティア説明会
2月9日	よこはま国際フォーラム2013 「みんなの思いが力になる」Tree Seed報告
10日	よこはま国際フォーラム2013 ネパール「幸せを分かち合う」村づくり
14日	第9回理事会
17日	地球の木講座「ブータンと日本」
21~23日	第12回南北コリアと日本のともだち展（青山こどもの城）

＊この他、各チームミーティングなどが開かれました。

第14回地球の木総会のお知らせ



日時：5月25日（土）13：15～15：00　総会
15：15～16：45　安井清子さんのお話（ラオス山の子ども文庫基金
エッセイスト　モン文化研究）
場所：オルタナティブ生活館オルタリアン（2F）
地球の木が販売しているクラフトを製作しているモン族やラオスの暮らしのお話をしていただきます。
＊詳細は同封の「総会のお知らせ」をご覧ください。

「幸せ分かちあい年末募金」へご協力いただき、ありがとうございました

皆さまの温かいお気持ちに感謝いたします。
いただいたご寄付は、ネパール・カンボジア・ラオス・気仙沼でがんばっている人たちの笑顔を増やす活動となるよう、大切に使わせていただきます。

各寄付先と金額は以下のようになります。

・無指定	278,401円	・ネパール	56,000円
・カンボジア	55,000円	・ラオス	60,500円
・気仙沼	105,000円	・合　計	554,901円

※ 2012年のご寄付の領収書は2月初めに発送いたしました。ご不明な点がありましたら、事務局までお問い合わせください。

地球の木カレンダー2013「大地にうたう」ご協力ありがとうございました

みなさまのご協力のおかげで978部販売いたしました。ありがとうございました。少々残りがありますので、購入希望の方は地球の木事務局までご連絡ください。

地域で活かそう！PRA

カマル・フヤルさんに学ぶ参加型ワークショップ
地域で活かせる参加型の進め方について、楽しく学びます。

日　時：3月24日（日）13:30～16:30
場　所：アートスクエア木月（元住吉）
参加費：1,500円

ネパール料理の会
カマルさんと一緒にネパール料理を作り、テーブルを囲みましょう。

日　時：3月24日（日）17:30～19:30
場　所：中原市民館
参加費：1,000円

定　員：いずれも25名（先着順、定員になり次第締切）
主　催：地球の木　共催：K-DEC

地球の木カフェのお知らせ

地球の木カフェ＠space nana（あざみ野）

あざみ野初出店の地球の木カフェです。
日時：3月23日（土）12：30～14：30
14：00～15：00「クメールシルクの光と影」
地球の木クメールシルクプログラムの話
料金：1,000円（地球の木カレー、ラオスコーヒー付）
場所：スペースナナ（横浜市青葉区あざみ野1-21-11）
東急田園都市線・市営地下鉄「あざみ野」駅西口より徒歩6分　TEL 045-482-6717
3/20日（水）～24日（日）スカーフの展示販売を行っております。

地球の木カフェ　期末セール

日時：3月29日（金）11：30～17：30
場所：地球の木関内事務所
地球の木カレーや手作りケーキもありますよ。

「もったいない」を掘り起こそう！！

引出しの片隅に、書き損じはがきや商品券などが眠っていませんか？そんな「もったいない」を地球の木にぜひ送ってください。活動の資金として有効に役立てます

未使用・書き損じはがき、未使用切手（日本切手）、商品券・ギフトカード・図書券・ビール券など全国共通の金券などが眠っていましたら送ってください。
＊詳細は同封のちらしをご覧ください。

あーすフェスタかながわ2013

7ページでも紹介した「あーすフェスタかながわ2013」が今年も開催されます。皆様行ってみませんか？

日　時：5月11日（土）・12日（日）
場　所：あーすプラザ・栄区民文化センターリリス
〒247-0007　横浜市栄区小菅ケ谷１－２－１
（JR根岸線「本郷台」駅改札出て左すぐ）

編集後記

私たちの仲間であり、ともに活動していた湘南のKさんが去年の11月亡くなりました。彼女は環境や農業について深く考え、自然破壊や荒廃させないエコな生活、またコメを大事に食べ続ける生活を目指していました。彼女の思いを心に留め、心からご冥福お祈りいたします。（T.K）

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。
また，神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど

VEGETABLE OIL INK